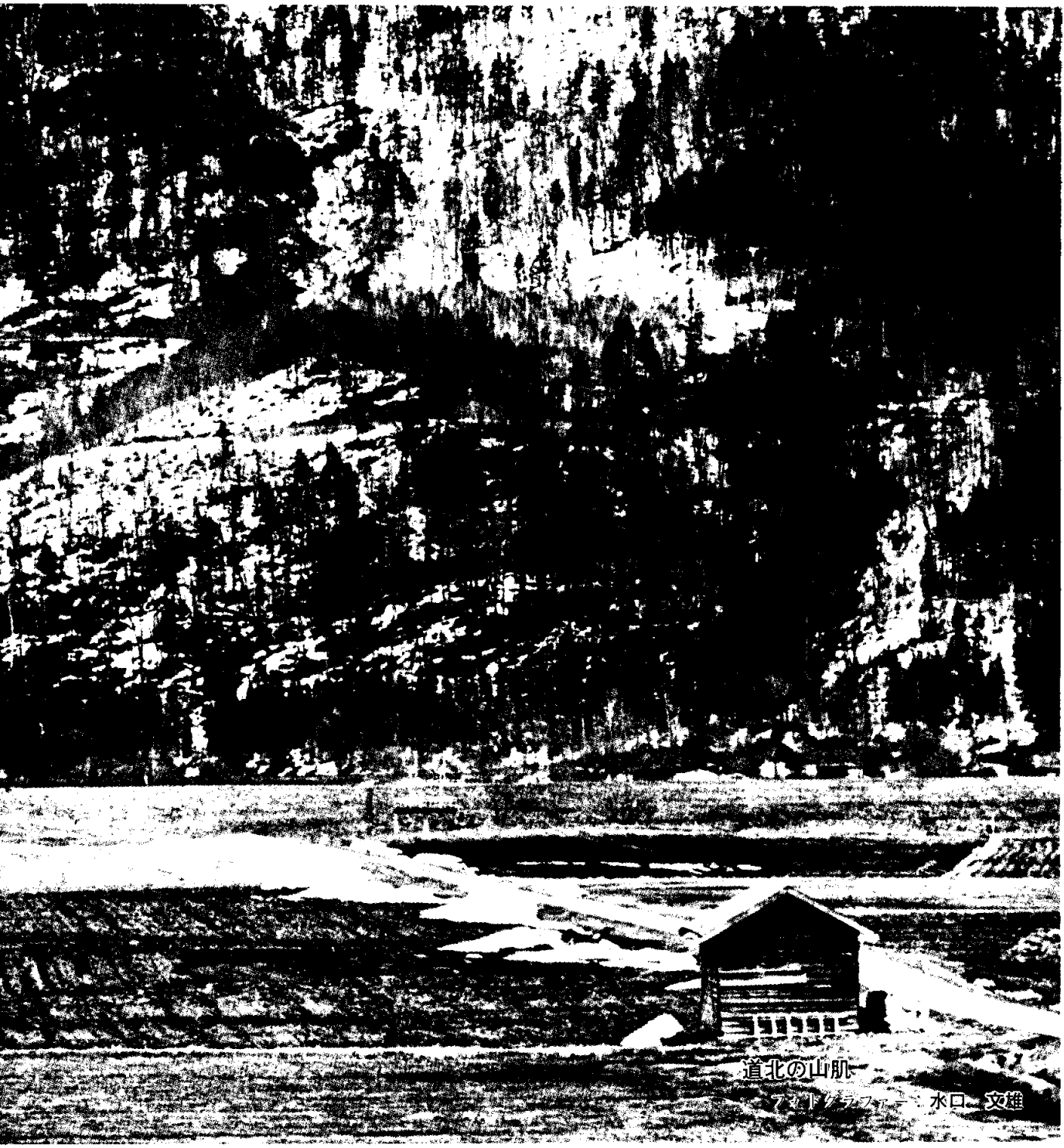
NC 自然・環境・人

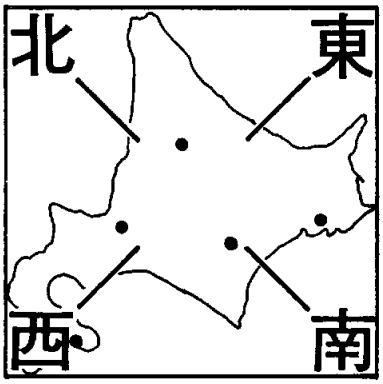
No. 48

北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1984年9月号



道北の山肌
フォトグラフィー　水口　文雄



「支笏湖にレジャー基地は、いらない！」

前田　重和

支笏湖は、支笏洞爺国立公園の中核に位置し、都市近郊の湖として北海道内はもとより、本州方面や遠くは外国の人達にも人気のある美しい原始のたたずまいを残している貴重な湖です。今この支笏湖の一角である美笛地区に、一大レジャー基地の計画が持ち上がって来ました。ヤマハ、日航、千歳市、大滝村が共同で第三セクター方式で民間会社を作り国立公園内の美笛地区に大規模なホテル（百室二百名収容）テニスコート（十面）などのスポーツ施設やモーターボート基地、公園外の白老岳には水源かん養保安林をつぶして八コースものスキー場とペンション村などの諸施設を作ろうとするものです。

私達「支笏湖の自然を考える会」は、この計画を一月十六日付の新聞紙上で知り大変におどろき、そして支笏湖の将来を心配いたしました。間もなく詳しい資料が手に入り、すぐに支笏湖で出合った人達や、そこをフィールドにしている人達に連絡をとり三月二十八日に、札幌市民会館において、約百五十名の参加を得て、このレジャー基地構想に対する反対運動の会を結成いたしました。

美笛川河口附近

今回のレジャー基地構想は、支笏湖の原始のたたずまいの中に、都市型レジャー施設を強引に持ち込む短絡的な発想であり、支笏湖の本来持っている自然環境を十分に生かすようなものとは異なります。

札幌オリンピックの時に作られた、恵庭岳の滑降コースは、今だにその緑を回復することが出来ません。自然は一度破壊してしまうと、その回復には、気の遠くなるような時間が必要となるのです。

私達の知る限りこの計画は、貴重な支笏湖の自然を損うものです。

開発側の方が、認めている様に、この支笏湖には、「客を呼べる自然環境」が有ります。そこに人間が、何もつけ加えなくとも十分すぎるくらいの魅力があり、それは人間が手を入れはじめると同時に少しずつ無くなってゆく魅力なのです。やがて「そして、誰も、来なくなった。」という事になります。

支笏湖の自然を守りこれらを次の世代の人達に送り届けることは私達の責務です。

私達は、この計画の白紙撤回を求めると同時に、これからの支笏湖と人間とのかかわり合いについて、又、本来のあるべき姿での有効利用とは、どういう形なのかをこの支笏湖にかかわるすべての人達とともに考えてゆこうと思います。

（支笏湖の自然を考える会会員・札幌市在住）

核廃棄物について考える

滝口　亘

世界の原発は、今期南アフリカが参加したことで二十五ヶ国、三百十一基、容量にして二億九百万kwになった。

原爆を平和利用の衣で装飾した原発は、基本的には、原爆がもつ危険性をそのまま背負う宿命にある。小さな島国、日本列島は、この危険な原発を既に四十三基（準備中も含め）もかかえ込んでいる。

しかし、この原発も、西側では歴史の遺物となりつつある。本年上半期に建設が確認されたのは十四基。着手は七基。合計二十一基のうち西側ヨーロッパは〇である。

このような背景には、原発の操業にともなう廃棄物の処理・処分、廃炉の処理などの問題が、解決されない課題として重くのしかかっているからである。また安全性の追求にともない、際限ない工期の延長などが原発電力のコストを引き上げ、原発を割に合わなくさせてもいる。

廃棄物処理・処分は、各国とも確実な解決手法をもっていない。その証拠に、

西独は、中国に処分を依頼したと報じられている。保管料は一兆三千五百億円。

わが国では、毎年五、六万本の使用済み燃料や低レベル廃棄物が生産される。昭和七十五年には百万本を超える。高レベル廃棄物も海外からの返還を含め、七千本になるといわれる。

政府や動燃では、この廃棄物を地元の誘致を口実に、サロベツ国立公園の僅か十数キロの地に処分することを考えているという。広大といっても北海道の広さは、中国の比ではない。

（社・北海道自然保護協会理事・札幌市在住）

発想転換が必要な「美瑛富士スキー場開発計画」

寺島　一男

今夏は晴天が続いた。馬鈴薯の白い花が、いつもの年より早く美瑛の丘陵に波打った。この丘越しに眺める十勝の山並は、なかなかすばらしい。明るく伸びやかな山並と、季節感溢れる丘陵が相俟って、趣深い景観をつくっている。この程浮上してきた「美瑛富士スキー場開発計画」は、この景観を大きく損おうとしているだけに、罪深い。

総対象面積千二百七十一ヘクタール。ゲレンデ敷地面積二百七ヘクタール。施設敷地面積二十五ヘクタール。ゴンドラ一基三千三百八十メートル。リフト四基総延長六千三百五十メートル。レストラン二棟二百九十坪・五百二十席。ヒュッテ一棟七十六坪・百二十席。駐車場二個所・三千台収容。進入道路二本・総延長千九百メートル。その他・防災工事。主な計画の内容である。

美瑛町は、かねてから人口の減少、特に若年令層の流出、白金温泉地区の観光客入り込み数の減少を理由に、新たな観光開発計画を練っていたが、その目玉としてこの度この計画を登場させたものである。本州大手資本である西武の資金力を導入して、第三セクター方式で開発を進めようというものである。西武側はすでに現地視察も終り、自らも年間四十六万人の滞在人員を見込んだ、直営の高級大型ホテルを建設する予定になっている。

残雪の十勝連峰

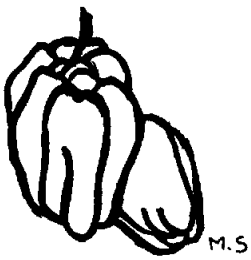
道南の横津岳、支笏湖周辺の白老岳に、現在、航空会社とタイアップした大手資本が、高級ホテルとスキー場建設を中心としたレジャー基地開発をしようとしているが、美瑛富士の場合も同じパターンである。

計画の対象地は、全域が国立公園と水源涵養保安林指定になっている。美瑛富士山麓からオプタテシケ山麓にかけての一帯は、十勝岳連峰切っての天然林地帯であり、美瑛川源流域の原生林に連らなる重要地域である。森林帯の上部には、エゾイソツツジとアカエゾマツが溶岩流の上に密生する、見事な〝天然庭園〟が存在する外、純林に近いアカエゾマツの林も残っている。

計画地と美瑛川を挟んだ向い側は、国設野鳥の森で、ここでは現在、天然記念物のクマゲラを始めとして六十種を越える野鳥が観察されている。このような豊かな野鳥の宝庫も、当然のことながら美瑛富士山麓一帯の豊かな森林に支えられているからこそである。この外、ヒグマを含めて数多くの野生動物が棲息している。河川改修のされていない、イワナの棲む原始河川に近い美瑛川もある。一連の大規模なスキー場開発が、いかに〝自然保護に配慮して〟すすめられようとも、これらの自然に何をもたらすかは、あまりにも明瞭である。

最近になってこの計画は、住民主導といわれる「ジャパン・ヘルシー・ゾーン計画」の中に組み込まれた。〝ヘルシー・ゾーン〟計画が、何を意図する開発構想かは別として（大いに期待するところもあるが）、スキー場計画だけが、唯一具体性を持った計画として独り歩きしている現実は、甚だ危険である。周囲に似たようなスキー場があり余る中で、大資本の論理に基いた地域開発が、結局どうなるかは、これまた例を持ち出すまでもなく、あまりにも明白である。衆知を集め、どうしたら自然を切り刻むことなく地域開発にいかせるのか、大きな発想の転換が今こそ必要だと思うのだが。

（旭川工業高校教諭・旭川在住）



ESSAY

ニッコウキスゲ

文・石城　謙吉

高校時代の担任だった、浜多津先生から葉書きがきた。浜先生は、旧制中学以来の男の城だった私の母校に、初めての女の先生として乗りこんできた人である。その先生が二学年からクラス担任になると聞かされた時、私たちは大いに憤慨し、また身の不運を嘆きあったものである。しかし間もなく私たちは、この小柄な中年女性の実力と手ごわさに、残念ながら一目も二目も置かざるを得なくなったものだった。卒業後三〇年も経った今でも、私たちはやはり先生には頭が上がらず、しかしそれでいて、郷里に帰ると先生の家に行く。

その浜先生からの便りは、過日送った自著への礼状であった。文中に、「石城流文章スタイルが、前著よりも洗練され……」とある。洗練され、の前のあたりに「少しは」というあえて書かれざる文字がチラついているようで、やはり、冷汗が出そうである。

しかし、私の胸に泌みたのは、「今年も霧ケ峰高原にニッコウキスゲがよく咲きました」という、末尾に添えられた一文であった。山が好きだったかつての教え子へ、さり気なく郷里の自然の息吹きを伝えてくれた先生のやさしさに、故郷のぬくもりを感じたのである。

だが、じつを言うと、この一文が私の胸に呼びおこしたのは、懐しさだけではない。たしかにニッコウキスゲは今も咲くにせよ、郷里信州の霧ケ峰高原というものが、かつての姿とはおよそ違うものになり果てていることを思い出さずにはいられないのである。

「深き秋」鹿士　政春（道展会員）

その変貌ぶりを目のあたりにしたのは、今から四年前、家族を連れてそれこそ二〇数年ぶりに霧ケ峰を訪れた時のことであった。霧ケ峰高原は、長野県諏訪盆地の東北側にひろがる広大な溶岩台地であるが、四季おりおりに花の咲き乱れるこの見渡す限りの草原は、諏訪地方で育つ者にとっては、たくさんの想い出が刻まれる、故郷の自然の象徴とも言うべき場所である。高校時代の夏休みを山荘のアルバイトをしてここで過したりもした私にとっては、ここは青春の幕あけの場でもあった。世の常で、そのすべてが昔のままとはけっして思わぬものの、高原に近づく私の胸は、愛する世界に再会する喜びで溢れていた。

ところが、高原に着いた途端に私が見たものは、思わず息を呑むような光景だった。なによりもまず、草原のド真中を見るも無残に切り裂いて自動車道路が延々と続いている。高原の広さと静けさを味わうべき場所を自動車やバイクで走り廻るとは、なんたることか。それに、道路沿線には、これも景色の良い所、良い所を占領しては俗悪な観光施設が建っているではないか。それはまさに、観光資本が観光資源を食い潰す図の典型であった。子供にせがまれて飲み物を買いにはいったその中の一軒は、御多分にもれずで大勢の観光客と店員の叫喚の場になっていた。それに拡声器が場違いな歌謡曲をがなり立てる。高原の世界特有のあの広さと静ひつさは、いったいどこへ行ったのか。もはや、ノビタキやコジュリンの囀りもなにも、あったものではない。

思わず胸につきあげてきたのは、よくもこんなに、という思いであった。俺の愛した霧ケ峰を——。こうなると、家族にはあまり面白くない行楽になってしまった。なにしろ私が不機嫌に黙りこみ、しかもそれがだんだんとひどくなるのだから。なんとなく様子を察ったらしい妻がとりなし顔に言った。

「結構、良い所だわね」

それがまた、気にくわない。良かったのは昔の霧ケ峰高原で、こんなに変ってしまった姿のどこが良いものか。しかし妻は苦笑しながら言いだした。よそに出て行ったきりの者が急に姿を現わして、昔と変わったといってそう一人で怒っても仕方がない。第一、諏訪に税金も払ってるわけじゃなし。

まさに、とどめを刺された形であった。北海道の人間になりきった者に、いま、なにを言う資格があろう。私は悄然たる思いで高原をあとにした。

しかし、それ以来、今も時々思うのである。この国には、故郷を離れて暮す人々がどれほどいることだろう。そして、全国の津々浦々が開発の波に洗われている昨今、その中のどれほど多くの人が私と同じような思いをしていることか。古くから日本人の心情には、故郷への思慕がひそみ、それが心の慰めとも、また支えにもなってきたのだと私は思う。その故郷というものが、これほどどしどしと姿を消して、これで果してよいのだろうか。

これはひがみを言っているのではない。異郷に暮す多くの人間が、故郷を懐しみながらも実際はそこを省りみないでいることへの反省でもあるのだ。私自身、諏訪に残って暮し、そこで霧ケ峰高原の自然を守るために闘ってきた人々に、いったいなにをしたのか。

こんなさまざまなことを思いながら、私は懐しい恩師の筆跡をくり返して読む。そしてふと、今も変らぬものは、故郷の草原に咲いた花のことを伝えてくれた人の心だろうか、と思うのである。

（北海道大学苫小牧演習林長・苫小牧市在住）

自然豆事典

多くの人々はいまだに森林のもつ測り知れない重要性に対し十分な認識をもっていないようにみえる。森林を愛するわずかな人は、現実逃避者か自然への執着者であるかのようにみられているし、森林愛好者の多くも実際にそのような人であることがある。そこで、今回は森林が人間の健康や環境に対してもつ保全機能についてふれておこう。森林は人間社会の生活基盤を確保している。主に、カール・ハーゼル「林業と環境」(1971)による。

〔森林の空気浄化作用〕 どこの大都市でも、多数の自動車から出る排気ガスのほか、ゴムとアスファルトの細かなホコリが空中に渦をまいている。工場が多ければ、さらに有害な排出物が加わる。森林は、この汚染された空気を清浄化する。都市の周囲に森林があれば、汚染物質をふくんだ空気は木の幹、枝、葉の間を通過し、物質は葉や枝に付着する。雨がふると、物質は林地に洗い落され地中に固定される。これが降雨のたびにくり返される。トウヒとマツの森林は1ha当たり30－35㌧、ブナの森林は68㌧までのホコリを収容することができる。

〔森林の貯水機能〕 森林は、降った雨が直ちに海に流出するのをふせぎ、土砂流出と洪水をふせぐ。夏には水不足を緩和する。なぜそうなのか。森林の土壌は、木々の根と土中の動物によって、裸地の土よりもはるかに多くの空間をもっている。この空間は大量の水をとらえ、水は土の中を移動する。森林土壌の貯水能力は、木々の根の深さが1mの林地で1ha当たり500㎥から2000㎥であると推定されている。

〔森林の土保持機能〕 森林の貯水機能は傾斜地の土砂流出をふせぐ。裸地では雨が一時に地表を流れ土砂が運び去られる。傾斜した畑では、大雨や雪どけによって土がさらわれて低地に堆積されたり河川を通って海に運ばれたりする。したがってすべての急斜面は森林であることが望ましく、そうでない場合は農耕に欠かせない土壌の損失と、出水による被害が毎年くり返される。また海に流出する土壌は海中生物の存続をおびやかすのである。

森林のもっとも重要な保全機能をあげた。森林はこのほかにも騒音や放射線を防止し、水を浄化し、風害や洪水を阻止し、気候を温和にする機能をもっている。このことからも、都市と道路、工場の周辺、すべての山岳と傾斜地は森林であることが住民の健康と国土保全のために欠かせないことがわかる。

紺谷友昭（大谷短大講師）

支笏湖美笛地区開発問題について

支笏洞爺国立公園のいっかくを占める支笏湖の美笛地区において、日本楽器製造、日本航空、千歳市、大滝村の四者による第三セクター方式で、大型のレジャー基地を建設しようとする計画がもちあがっている。その具体的な施設内容は、明らかにされていないところが多いが、支笏湖の貴重な自然景観を損う恐れが大きいため、反対の意を表明してきた。この間の経緯については、前号（No.47）の『支笏湖周辺の自然環境の保全について』を参照願いたい。その後、通常総会の決議を踏まえ、昭和五十九年六月に当事者及び関係諸機関に対して要望書（以下掲載）を提出し、また、八月に当該土地管理者である北海道営林局あて質問状（以下掲載）を提出した。

現在、支笏洞爺国立公園の公園計画の見直しが行われているが、支笏湖地域は全域国有地であり、自然保護の強化を基調として当該地区の計画が改訂されるよう関係者の英断を期待する。

HNCS第三九一号
昭和五十九年六月八日
北海道知事
横路孝弘殿

社団法人　北海道自然保護協会
会長　八木健三

支笏湖周辺の自然環境保全に関する要望書

支笏湖は恵庭・風不死・樽前の三火山にかこまれた特異な形態のカルデラ湖であり、深度三六〇メートル、紺碧の水をたたえ、その周辺は豊かな針広混交林により特徴づけられております。

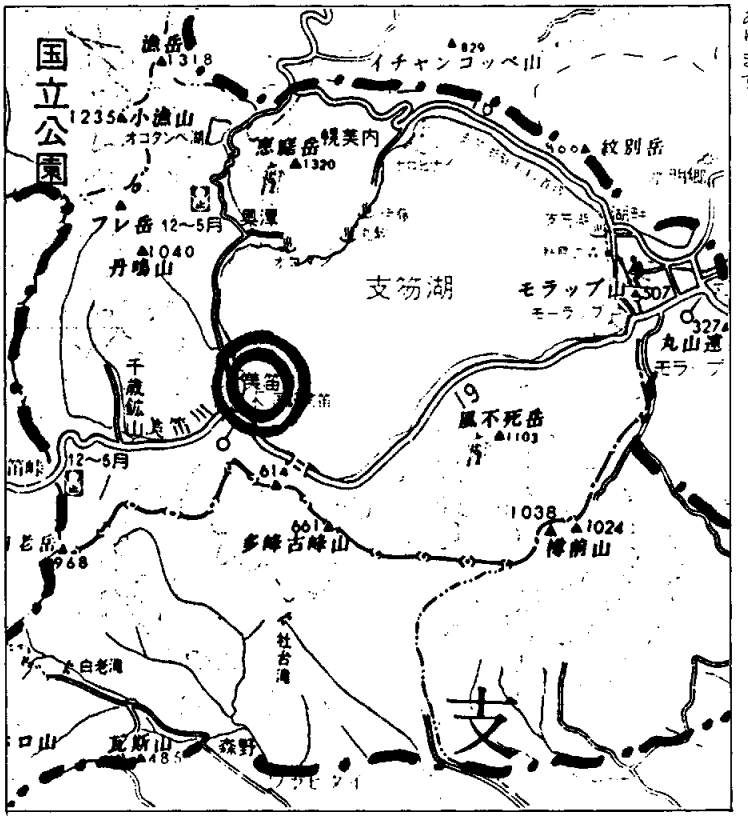
また、大都市札幌及び千歳、苫小牧にきわめて近い距離にありながら、支笏洞爺国立公園内でもっとも原始の姿をとどめ、年間二百数十万に及ぶ来訪者に健全な野外リクリエーションの場を提供しております。

この支笏湖の自然こそは、われわれに残された貴重な財産であり、これを大切に守り、次代につたえることは、われわれに課せられた大きな責務であるのみならず、これによって始めて支笏湖の観光も将来にわたって発展しうるのであると信じます。

この見地より、われわれは支笏湖周辺の自然を損うおそれのある、新たな観光開発計画に対しては強く反対するものであります。

かつて札幌オリンピックにあたり、同組織委員会の強い要請にもかかわらず、丸駒温泉通過の湖岸道路の建設を許可しなかった当時の町村知事の毅然たる措置を想起しつつ、今後支笏湖周辺の自然環境保全に尽力されますよう要望いたします。

◯支笏洞爺国立公園区域　◎美笛開発地点



HNCS第三九一号
昭和五十九年六月八日
日本楽器製造株式会社
社長　川上　浩殿

社団法人　北海道自然保護協会
会長　八木健三

支笏湖周辺の自然環境保全に関する要望書

支笏湖は恵庭・風不死・樽前の三火山にかこまれた特異な形態のカルデラ湖であり、深度三六〇メートル、紺碧の水をたたえ、その周辺は豊かな針広混交林により特徴づけられております。

また、大都市札幌及び千歳、苫小牧にきわめて近い距離にありながら、支笏洞爺国立公園内でもっとも原始の姿をとどめ、年間二百数十万に及ぶ来訪者に健全な野外リクリエーションの場を提供しております。

この支笏湖の自然こそは、われわれに残された貴重な財産であり、これを大切に守り、次代につたえることは、われわれに課せられた大きな責務であるのみならず、これによって始めて支笏湖の観光も将来にわたって発展しうるのであると信じます。

この見地より、われわれは支笏湖周辺の自然を損うおそれのある、新たな観光開発計画に対しては強く反対し、自然環境保全に尽力されるよう要望いたします。

また、日本航空株式会社社長　高木養根殿、千歳市長　東峰元次殿、大滝村長館林俊圀殿、環境庁長官　上田稔殿、北海道営林局長　鈴木郁雄殿あて同文要望書提出。

HNCS第四一二号
昭和五十九年八月一日
北海道営林局長
鈴木郁雄殿

社団法人北海道自然保護協会
会長　八木健三

支笏湖美笛地区の自然環境の保全について

盛夏の候ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、支笏湖美笛地区におきまして、地元千歳市を中心に観光開発を計画しているやに聞知しておりますが、自然保護の立場から、大変憂慮いたしております。

つきましては、ご多忙のところ甚だ恐縮とは存じますが、次の点につきまして、貴局のご見解を賜りたくご回報下さいますようお願い申し上げます。

一、千歳市等が計画する支笏湖美笛地区の観光開発について

二、支笏湖美笛地区苗圃跡地の取り扱いに対する貴局のご方針について

何卒、当該地域の自然環境の保全の観点から、特段のご配慮を賜りますようお願い申しあげます。

五九札第四九〇号
昭和五十九年八月三日
社団法人北海道自然保護協会
会長　八木健三殿

北海道営林局総務部長

支笏湖美笛地区の自然環境の保全について

国有林野の管理・経営につきましては、日頃より格別の御理解と御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

八月一日付けのこのことについては、次のとおりです。

一、について

千歳市等の構想がまだ具体化していないこともあり、意見を述べる段階にはないものと考えております。

二、について

今後における支笏洞爺国立公園計画の見直しのなかで慎重に検討されることになっております。

なお、当局としては、支笏湖周辺等の国有林野の管理・経営に当たっては、自然環境の保全との調整に十分に配慮することとしております。

チリ紙交換と割ばし

大館　和広

私は、どんな小さな紙でも、要らなくなったらチリ紙交換に出している。チリ紙交換は、新聞とマンガの本と思い込んでいる人がいるかも知れないが、どんな紙でもいいのです。

要らなくなったレシート、メモ用紙、失敗した原稿用紙、紙袋、紙のハコ、ノートや便せんの表紙、本のカバーなど、あげるとキリがないが、とにかく、不要の紙は取っておいてチリ紙交換に出している。

何故こんなことをしているのか、と云うと、大げさに云うと、地球の木を緑を守る為だ。紙を大切にすると云うのは木を守る事につながり、木を守る事は山を守ることにつながる。そしてそれは地球全体の山を、緑を守る事につながって行くのだと、私は思っている。

今、日本人が一番紙をムダ使いしていると云うから、もしも日本人の半分がこれを実行したらどうだろう。どの位の木が残るだろうか。具体的な数字はわからないが、かなりの数字になると思う。

それから、割ばしだ。

これがまったく良くないと思う。割ばしの消費料はものすごいと思う。何とかならないものか、と常々思うのだけれどいい考えがない。私は家では使わないようにしているけど、外では使ってしまう。

チリ紙交換も割ばしも、みんなで実行できたら、と思う。

これが、小さな自然保護運動、身近な自然保護運動になりはしないだろうか。

（もんべつ　かいはつ　くらぶ代表）

北海道の自然保護を考える

上田　恒夫（北海道生活環境部長）

インタビュアー　新妻　博
（当協会副会長）

新妻□広範な、しかも多岐にわたる生活環境部のおしごとの中から、きょうは私ども自然保護に係わるものにとって関心の深いことについておたずねします。まず、新任のご感想から…。

上田■たいへん責任の重さを感じております。それだけにやりがいのあるしごとですから全力を傾けてやります。手抜きはしない覚悟です。

新妻□力強い決意の言葉を伺って大へん心づよく感じております。私たち自然保護団体は、もともと行政と対立する立場ではなく、真に道民のしあわせなくらしを求めて、自然とはなんであり、どのようにあらねばならないかということを追究して行くことを目指して、その立場から発言し行動しています。そのためにある部分では企業の自己本位な考えにもとづく計画に反省を求め、あるときは行政機関に苦情を呈して反対運動をも展開してきました。ときには「なんでも反対の団体ですか」などと皮肉を言われたこともありましたが、ほんとうの意味は、地域に生活する住民の、より人間らしい、人間性を尊重した健康な暮らしの基盤をこの北海道の自然の中に見つめて行こうとするものです。その意味はそのまま行政への助言として味方にもなるもの、と信じています。このことはよく理解いただいているとは思いますが、ひとこと申し添えて置きます。さて、大づかみにして自然保護のとりくみのバックボーンをどのあたりに置いて進めておられますか。

上田■これはすこし生の表現かもしれませんが、道は五三年に、環境汚染の未然防止を図るために「北海道環境影響評価条例」を制定し、全国にさきがけて環境保全施策を総合的に講じてきました。私どもはこれを基にしておりまして、ルールはしっかり守ろうと呼びかけて、その実行を約束してきました。私がとくに申したいことは、さいわいにこの思想が—開発優先から環境保全へ—全道の公的機関にも民間企業にも広く浸透普及して定着してきていることです。とくに民間の努力は着実にすすめられており、本道の環境汚染は全般的に改善の傾向にあります。自然保護、とくに河川湖沼の水質汚濁の防止問題や森林の保護については一般の盛り上りが急速に高まっておりまして、これからは以前にも増して積極的できめこまかい指導が要求されるようになってきました。これには、近ごろ道民の自然に対する見かた考え方の大きな変りようがはっきりと映しだされています。つまり価値観が変ったということでしょう。すべてのものの価値の転換がそこに見られるわけです。そういうことをつよく感じております。

新妻□それだけ、自然保護の行政がやりやすくなったということでしょうか。

上田■そういってもいいかも知れませんが「このしごとには各分野のあらゆるものが関連して、すべての事象につながっているわけですから、事の処理や決定に当ってはますます複雑になっていることは事実です。いつも指摘される、本道の貴重な自然である湿原の保護についても野生動物の問題も重要であると考えております。また、報道機関にもとりあげられた洞爺湖中島の鹿の問題、大雪山のヒグマなどがありますが、なかなか単純に割り切れないものがあるわけです。

新妻□野生化したミンクにしても、たんに養鶏や養魚関係の被害の問題だけでなく、いわゆる生態系にどのような影響を及ぼすかという点に係わることなので重要です。今年度は、私ども自然保護協会もヒグマの調査とともにミンクの方も協力させていただいております。どうも私どもは行政に注文をつけることが多くていささかつらい面がないことはないのですが、こういう形で事前に調査なりなんなりに協力し合って行くという態勢をとる機会が多くなれば、北海道の自然をより良く保全して行ける途を、案外すらりと見出して行けそうな気がします。

上田■道としましては、自然環境保全対策の推進のやり方として、ひとつには「保全すべき地域の明確化」を考えています。これは自然環境の保全を総合的、計画的に推進することを目的にしています。いま、これに必要な検討や調整などの取りまとめの作業を進めています。つぎには「自然環境保全のための諸調査の実施」です。自然環境に関連する諸問題に適切に対処し、その保全施策を効果的に講ずるためには、複雑で精緻なバランスのもとに維持されている自然環境の実態の把握が必要です。近ごろ、野生動物が種によっては減少の傾向が指摘されていますが、一方に農業、漁業の被害が多発して問題となっております。さきほどのヒグマの調査はその例です。

新妻□ご出身は歌志内で道産子三代目、しかも農政畑を歴任と承っておりますが、北海道にゆかりの深い方をお迎えして北海道の自然保護を考えていただけるのは嬉しいことです。これからは世の中の変貌とともに北海道もいろいろとやりにくい面がどっと押し寄せてきそうです。本州大手の企業の進出が活発ですし、支笏湖周辺の開発プランなどについては大きな関心をもって臨んでいます。自然の景観をぶちこわしにするだけではありません。支笏湖もいま以上には荒したくないですね。どうか歯止めをかけてください。自然にもシートベルトをしっかり掛けるときです。

お忙しいところをありがとうございました。

協会の活動

○昭和五十九年六月六日（水）
五十九年度第三回常務理事会
主な議題
一、第十六回全国書初め展覧会共催の件
二、コウライキジ捕獲禁止に関する公聴会の件
三、旅費規定別表の件
四、会務分掌の件
五、支笏湖周辺の観光開発の件
六、日高横断道路の件

○六月八日（金）
『支笏湖周辺の自然環境保全に関する要望書』提出
総会の決議に基づき、千歳市長、大滝村長、日本楽器製造社長、日本航空社長、環境庁長官、北海道営林局長、北海道知事あて要望書を提出。

○六月十八日（月）
コウライキジの捕獲禁止に関する公聴会
主催　北海道
場所　道庁別館六階
出席　新妻副会長
公述人として、捕獲禁止に賛成する旨、発言

○六月二十四日（日）
自然観察会
場所　北海道大学構内
講師　森田弘彦氏
参加者　四十五名

○六月二十五日（月）
北海道自然環境保全審議会
場所　北方圏センター国際会議室
出席　八木会長
主な議題
一、昭和五十九年度道設鳥獣保護区の設定及び鳥獣保護区特別保護地区の指定について
二、狩猟鳥獣の保獲の禁止について

○七月二十八日（土）～二十九日（日）
夏休み日高自然セミナー
主催　北海道自然保護団体連合
場所　日高・ペテガリ山荘
出席　八木会長、講師として出席

○八月一日（水）
『支笏湖美笛地区の自然環境の保全について』の質問状を北海道営林局長あて提出。

○八月二十二日（水）
五十九年度第四回常務理事会
主な議題
一、講演会開催計画の件
二、自然観察会計画の件
三、二十周年記念事業の件

○八月二十四日（金）～二十六日（日）
北海道自然観察指導員講習会
主催　当協会、財・日本自然保護協会
後援　北海道、北海道教育委員会、ニセコ町、財・前田一歩園財団
場所　虻田郡ニセコ町藤山
講師　金田　平（財・日本自然保護協会常務理事）
青柳昌宏（同右評議員）
工藤父母道（同右主任研究員）
八木健三（当協会会長）
俵　浩三（当協会常務理事）
小川　巌（野生生物情報センター代表委員）
参加者　四十二名

LOOK-IN

自然観察指導員講習会 ニセコ町にて

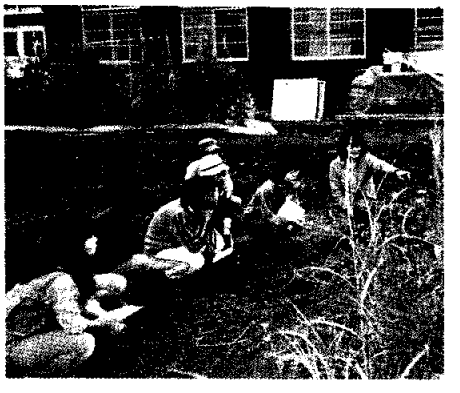
八月二十四日～二十六日の三日間、北海道では四回目の自然観察指導員講習会が開催されました。スキー場で有名なニセコ町内の藤山および五色温泉をフィールドに行なわれ、四十二名の指導員が生まれました。

同時に町内では、すでに道内で指導員になった方々の連絡組織である、北海道自然観察指導員連絡協議会の観察会と設立総会が開催されました。今回の受講生の多くがさっそくに入会されました。北海道での自然観察会運動の今後の発展が期待されます。

新しく自然観察指導員になられた方々は次のとおりです。

◇

塩谷彰浩　下島　亘　露崎史朗　豊島貢　長谷川哲雄　前田重和　真鍋知史
三澤英一　小澤真知代　川森るみ子　北野悦子　小林幾代　小山真希　清水朋子
永安芳江　住友順子（札幌市）　市川秀雄　中村真也　村野紀雄　渡辺好造　韮澤ちよ（江別市）　瀬川良明　新沼友啓（苫小牧市）　三上知也　前出聖子（広島町）　伊藤正清（室蘭市）　枝沢則行（清里町）　新見　修（帯広市）　新見光行（蘭越町）　船造淳一（岩見沢市）
矢崎一人（稚内市）　黒川一郎（千歳市）
小村洋子（留寿都村）　藤原洋子（石狩町）　相沢敬吾（千葉県）　海野一彦
杉本　泉（神奈川県）　小杉　潤（富山県）　金野光輝（岩手県）　鈴木直之（静岡県）　林　裕家（埼玉県）　町田隆史（東京都）



行事のご案内

（問い合せ、参加申し込みは、事務局〇二一―二五一―五四六五まで）

★記念講演会

今年、当協会は創立二十周年を迎えることとなりました。また、貴重な自然の宝庫である阿寒・大雪山両国立公園が指定を受けて半世紀を迎えました。

これを記念し、次により講演会を開催します。

お誘いあわせのうえ、奮ってご参集下さいますようお願い申しあげます。

主催　当協会、北海道新聞社
後援　環境庁（予定）、北海道、北海道自然公園協会
日時　昭和五十九年十月二十五日（木）午後六時～八時三十分
会場　道新大通館七階A・B会議室（札幌市中央区大通西三丁目）
入場　無料
プログラム
◇演題・講師
『阿寒・大雪山両国立公園紹介』　俵　浩三氏
『中国・小興安嶺の森林』　辻井達一氏
『メルヘンの村と自然』　加藤多一氏
◇映画
『北海道の歴史と自然』

★自然観察会

・十月十四日（日）
釜矢臼周辺の自然を訪ねて
集合　国鉄釜矢臼駅前・午前九時四十五分
解散　釜矢臼駅前・午後一時
持物　昼食、雨具、筆記用具
参加費　無料
雨天中止

・十一月四日（日）
初冬の野幌原始林を訪ねて
集合　道立図書館玄関前・午前九時三十分
解散　道立図書館前・午後十二時三十分
持物　雨具、筆記用具
参加費　無料
雨天中止

当協会入会方法!!

年会費＝個人会員（A）三、〇〇〇円　個人（B）二、〇〇〇円（同一世帯でたとえば夫婦・親子・兄弟など二名以上の場合二人目から）
学生会員＝二、〇〇〇円、団体会員＝一〇、〇〇〇円（一口）
会費納入＝北海道拓殖銀行本店〇一七二五九
北海道銀行本店一〇一四四四、郵便振替口座・小樽一―四〇五五

―編集後記―

★残暑のない北国、猛暑から急転直下の秋、会員の皆様にも、体調くずされた方もいらっしゃるのでは！

★支笏湖レジャー施設、美瑛富士のスキー場、千歳川放水路計画等々、次から次へと色々な問題が持ち上がって、協会も大忙しです。その内に「警察と、医者と、自然保護団体が暇な国に住む国民は幸せな国民…」なんて、新しい譬喩が生れるかも知れませんね。

★東西南北の前田重和さんは「支笏湖の自然を考える会」の中核をなす人ですが、「考える会」は、一月十七日に新聞紙上にその計画が発表されてから、わずか一ケ月たらずで会を発足させるなど、そのヤングパワーには今後共、期待したいですね。

★自然保護も重要ですが、先頃、アパートに居転した私こと、編集人Sにとりましては、冬場の灯油代の方が、より重要な問題となりそうな昨今ではあります…!?　（S）

寄贈図書

・「一粒の麦―政治に愛を―」（小笠原貞子著）学習の友社＝寄贈・八木健三
・「樹海に生きて、どろ亀さんと森の仲間たち」（高橋延清著）朝日新聞社＝寄贈・八木健三
・「一九八二年三月二十一日浦河沖地震調査報告」（酒井良男他）＝寄贈・八木健三
・『北海道における特異地盤に対する地震緊急対策に関する研究・第一編・第三編』＝寄贈・八木健三
・「電発三〇年史」（電源開発株式会社）＝寄贈・電源開発株式会社

☆右記の書物・資料は閲覧できますので、ご希望の方は事務局までお越し下さい。

☆図書寄贈のお願い

自然環境、自然保護に関する図書を収集し、当協会の活動を充実させていきたいと思います。

どうか、当協会に図書をご寄贈下さいますようお願い致します。

―寄付金―

金五〇〇、〇〇〇円　㈱北海道新聞社

北海道新聞紙齢一五、〇〇〇号記念に際し、当協会の活動資金として、ご寄付をいただきました。

金　五〇、〇〇〇円　桑原　宏
金　四五、〇〇〇円　斉藤新一郎
金　三、〇〇〇円　田尻　聡子
金　一、〇〇〇円　岩城　欣一
金　五〇〇円　午来　昌
金　三〇〇円　鎌奥　哲男
（敬称略）

☆ありがとうございます。

寄付金は、自然保護活動のために、活用させていただきます。

昭和五十九年九月二十五日発行
〇六〇　札幌市中央区北一条西七丁目
広井ビル五階
発行所　社団法人　北海道自然保護協会
電話（〇一一）二六一―六五八六（代）
（〇一一）二五一―五四六五（直）
郵便振替口座小樽一―四〇五五
北海道拓殖銀行本店　〇一七二五九
北海道銀行本店　一〇一四四四
発行人　八木　健三
印刷　特急印刷株式会社